



文京区立 森鷗外記念館NEWS

No.12



目次

巻頭コラム

「鷗外を撮った写真師、江崎禮二」

日比谷安希子(横浜市民ギャラリーあざみ野学芸員)

展示会場から

次回展示のお知らせ

特別展「ドクトル・リントロウー医学者としての鷗外」

特集

森鷗外記念館で現代アート! Vol.3

『刹那』よ『生まれ、お前はいかにも美しいから』

展示報告

活動報告

これからの催しもの

下半期開館カレンダー

編集後記

鷗外を撮った写真師、江崎禮二

日比谷安希子(横浜市民ギャラリーあざみ野学芸員)

森鷗外記念館に、明治22(1889)年頃の撮影と推定される若き日の鷗外のポートレートが所蔵されている。この頃の鷗外はドイツ留学を終えて帰国したばかりで、明治23(1890)年には『舞姫』を発表している。写真の撮影者は江崎禮二(1845-1910)。浅草奥山で開業していた写真師である。

江崎禮二は、弘化2(1845)年、美濃国(現在の岐阜県)の農家に生まれ、貧窮(ひんぎう)を学ばせられて、久世治作(1835-1893)のもとで学んでいた時に写真と出会う。19世紀前半に生まれた写真は、幕末に西洋から伝えられたばかりで、当時、横浜、長崎などの開港地を中心に写真館が何軒か出来ていたものの、一般的には、まだ物珍しいものであった。幕末、明治初期に主流だった写真技法はコロジオン方式ガラス湿板写真といい、ガラス板に塗った薬品が乾く前に撮影を行う手法で、撮影現場に暗室を持ち込んで薬品処理をその場で行わなければならない、写真師は化学の知識と修練を要求された。江崎は、この新しい職業で身を立てようと決意する。

明治に入ると写真文化の中心は、文明開化の中心が開港地から東京に移るのに合わせて、東京へと移行した。この頃には写真の購買層も、訪日外国人から日本人へと拡がり、当初は魂を奪うものとして迷信の対象だった写真も、文明開化のもたらした西洋文化の一つとして次第に受容されていった。明治4(1871)年に散髪脱刀令が公布されると、髷を落とす前後の姿を写真におさめるために多くの人が写真館を訪れ、さらに写真の普及を後押ししたという。写真師は花形職業となり、東京には著名な写真館が林立するようになった。

明治3(1870)年に上京した江崎は、慶應3(1867)年に発行された洋学者、柳川春三による写真技法書『写真鏡函説』で独習しながら、横浜の写真師、下岡蓮杖(1823-1914)に教を請うなどして写真術を身に付ける。明治4(1871)年には東京の芝田川町の知人宅の2階を改装して念願の写真館を開業したが、最初の営業はなかなか上手くいかなかったようだ。そこで再起を図り、翌年に浅草奥山に移転する。当時の浅草は、寺社の参拝客で賑わい、北には新吉原があり、明治6(1873)年に浅草寺一帯が公園に指定されると、公園内五区に花屋敷、六区に劇場や見物小屋、パノラマ館などの娯楽施設が軒を連ねる東京随一の歓楽街へと変貌を遂げていた。浅草を訪れる観光客を目当てにした写真館も有名無名を問わず立ち並び、浅草奥山は東京の写真館密集地の一つとなった。その中で洋風2階建ての瀟洒な江崎の写真館は評判となり、他の写真師が客引きを使つて営業する中で、江崎と北庭筑波(1831-1883)の写真館だけは、客引きをせずとも繁盛していたという。明治10(1877)年には東京だけでも百三十以上の写真館がある中で発行された写真師番付『東京写真見立競』にも、著名写真師たちと並んで「開脇」として名前が掲載されている。

江崎は進取の気性にも富み、明治16(1883)年に、当時イギリスで大量生産が開始されたばかりのゼラチン乾板を他の写真師たちに先駆けて輸入する。それまでの湿板写真に比べて、写すスピードが早くなり、持ち運びが楽になり、画質も向上した。江崎は早速、このゼラチン乾板を他の写真師たちに先駆けて輸入する。それまでの湿板写真に比べて、写すスピードが早くなり、持ち運びが楽になり、画質も向上した。江崎は早速、このゼラチン乾板を他の写真師たちに先駆けて輸入する。それまでの湿板写真に比べて、写すスピードが早くなり、持ち運びが楽になり、画質も向上した。江崎は早速、このゼラチン乾板を他の写真師たちに先駆けて輸入する。それまでの湿板写真に比べて、写すスピードが早くなり、持ち運びが楽になり、画質も向上した。

板写真は、感度が低いため一枚を撮影するのに数秒かかり、被写体は静止する必要がある。この時代に、ゼラチン乾板は撮影する場での薬品処理を要さない上に、感度が高いため、暗所や動体を写すことが可能にす。画期的な感光材料だった。早速、江崎は乾板による撮影を習得し、同年5月に墨田川で行われた海軍競漕の短艇競艇や、水雷発射の瞬間撮影に成功する。この様子は明治16年6月6日付の新聞『郵便報知』に「去年十九日墨田川に於て催はされたる海軍の競漕會に艇の馳走を寫取れるは、其鮮明なること恰も驚舟を寫せしが如く、殊に目覚しきは水雷火の轟然一發河水飛騰の状にて、是は實地見物したる者も一瞬間に見得ざりしも多き由なれば、尋常一般の技にては寫し得難かるべし。本邦にて飛動の物體を寫すは實に同氏が最初なるよし」と報じられている。

この成功によって、江崎は「早取り写真師」の異名をとり、江崎写真館の台紙の裏には、江崎の撮影した水雷発射と競艇の写真のイメージが印刷されるようになった。以降、ゼラチン乾板は急速に普及し、明治20(1887)年頃までには湿板写真を駆逐していくことになる。江崎は乾板撮影という新技術の旗手となり、明治20年には皆既日食の撮影にも成功している。

東京の名士となった江崎は、後に東京市會議員、市参事會員に選出され、明治23(1890)年に浅草に開館した日本初のエレベーター付高層建築、凌雲閣の社長もつとめている。ちなみに、この凌雲閣の設計に携わったスコットランド人建築家、ウィリアム・マクドナルドは、江崎と交友していた。



右 明治22(1889)年頃 江崎禮二撮影 / 左 裏面

アム・K・バルトン(1856-1899)に写真の手ほどきを受けたのが、「写真大尽」と呼ばれる鷗外の『百物語』の飾磨屋のモデルになった写真師、鹿島清兵衛(1866-1924)である。このあたりの文明開化期の写真を巡る人物相関図も、興味深いものがある。

【参考文献】

- 新井朝定編 『文武高名録 巻之二』 新井朝定 一八九六年
- 石里敬章 『明治の東京写真 新橋・赤坂・浅草』 角川学芸出版 二〇一二年
- 小沢健志 『幕末・明治の写真』 ちくま学芸文庫 一九九七年
- 佐々木豊明 『連載写真の先覚者達③ 江崎禮二』 (写真文化一九七九年6月号より)
- 細馬宏通 『浅草十二階 塔の眺めと近代のまなざし』 増補新版 青土社 二〇一二年

日比谷安希子

ひびや・あきこ
2005年より横浜市民ギャラリーあざみ野に勤務。2008年より横浜市所蔵カメラ・写真コレクション担当。主な展覧會に2011年「ID-写された"わたし"」、2014年「戦争とカメラ」など。

展示会場から

落合直文と森鷗外

森鷗外は、明治二四(一八九二)年八月二四日に医学博士の学位を文部省から授与された。鷗外三〇歳の時である。落合直文の手紙の日付が「八月廿七日」とある。旅行の途次このことを知り、帰京後直ぐに書いたものである。「過日は医学博士の大名譽を得られ候哉 兄を信愛する小生のよろこひいかにかりならむ」と直文はその喜びを伝えている。

その当時の「博士」は、学位令(明治二十年五月二十一日勅令第十三号)の第三條、博士ノ学位ハ文部大臣ニ於テ大学院ニ入り定規ノ試験ヲ經タル者ニ之ヲ授ケ又ハ之ト同等以上ノ学力アル者ニ帝國大學評議會ノ議ヲ經テ之ヲ授クニ依リ授与されるものであった。鷗外は「大学院ニ入り定規ノ試験ヲ經タル者」ではないので、「之ト同等以上ノ学力アル者ニ帝國大學評議會ノ議ヲ經テ之ヲ授ク」という理由により授与されたのである。

医師として登録されていた者の総数は約四万人、その内、医学博士であった者は九名、鷗外と同時期に医学博士となったもの二〇名、つまり「医学博士」という肩書を持つ者は三〇名に過ぎないという時代であった。(1)

落合直文は文久元年(一八六一)二月一日、陸奥国元吉郡(現・宮城県気仙沼市)伊達家の筆頭家老の家に生まれている(ひと月後の文久二年の一月一日、石見国津和野(現・島根県津和野町)に鷗外が生まれた)。直文は、平田派の国学者落合直亮の養子となり、一七歳の時に、養父とともに伊勢に赴き神宮教院において国書、漢籍を学んだ。

直文が上京するのは鷗外が大学を卒業する年の明治一四(一八八二)年。その翌年、東京帝國大學に設置されていた古典講習科に学び、国語、国文学を研究する。後に結社「浅香山社」(明治二六年結成)を主催し短歌革新を推進していく。

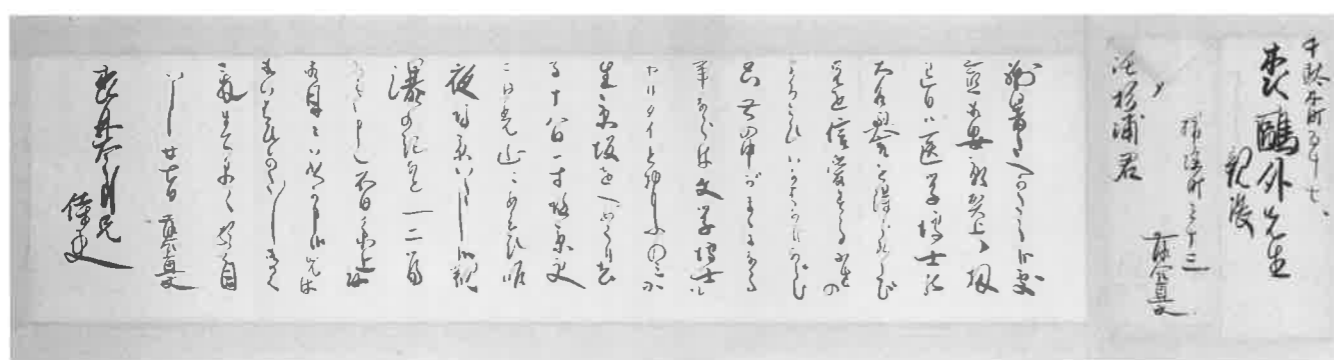
鷗外との関わりは早くから始まる。ドイツから帰国したばかりの森鷗外が市村讀次郎、井上通泰、三木竹二、小金井喜美子らとともに結成した文学結社「新声社(SSS)」に同人として直文も参加し、訳詩集『於母影』に、「君をはじめ見て見るとき、そのうれしさやいかなりし、むすぶおもひもとけそめて、笛の聲とはなりにけり」と始まるドイツの詩人シェップフェルの長詩を「笛の音」として鷗外と共に訳したことなどが知られている。あるいはまた、森鷗外主宰の文芸雑誌『しがらみ草紙』の創刊にも参加し、小説『悲哀』を発表している。

落合直文の鷗外に対する「信愛」の気持ちは、或る時、弟子筋にあたる与謝野鉄幹が直文に、あなた以外に誰を師とすべきかと問うたところ、唯一人森鷗外を紹介せん、多く彼人に嘘くべし」と答えたといった逸話にもうかがうことができる。(2)

手紙の中ほどに「只世の中がまゝになる事ならば文学博士もヤリタイ」とある。鷗外が文学博士を授与されたのは、明治四二(一九〇九年)七月のことである。直文はこれを知ることにはなかった。明治三六(一九〇三年)二月一六日に死去している。四三歳であった。

倉本幸弘(森鷗外記念會常任理事)

注(1) 丸山博『鷗外と医学』による。
注(2) 逸見久美『新版評伝与謝野寛品子明治編』による。



落合直文筆 鷗外宛

年不詳八月二十七日付
「明治二四年推定」

残署たへかたく候処 愈御安致賀上候扱
過日ハ医学博士ノ大名譽を得られ候哉 兄を信愛する小生のよろこひいかにかりならむ 只世の中がまゝになる事ならば文学博士もヤリタイとおもふのミ小生京坂を一めぐり去る十八日一寸帰京更ニ日光山ニあそび昨夜帰京いたし候觀瀑の記など二三篇かき申候不日参上致御目二いれ可申候先は御いはひかたく、御見舞まで草々頓首
八月廿七日 落合直文
森林太郎兄 侍史

展示のお知らせ

特別展

ドクトル・リントロウ

医学者としての鷗外



会 期 2015年10月3日(土)～12月6日(日)
 ※会期中の休館日 10月27日(火)、11月24日(火)
 会 場 文京区立森鷗外記念館 展示室1、2
 開館時間 10時～18時(最終入館は17時30分)
 ※11月6日(金)、7日(土)、8日(日)は20時まで開館
 (最終入館は19時30分)
 観覧料 一般500円(20名以上の団体:400円)
 ※中学生以下無料、障がい者手帳ご提示の方と同伴者1名まで無料
 ※各種割引がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。
 上 石黒忠憲を迎えた医学留学生達 明治21年6月

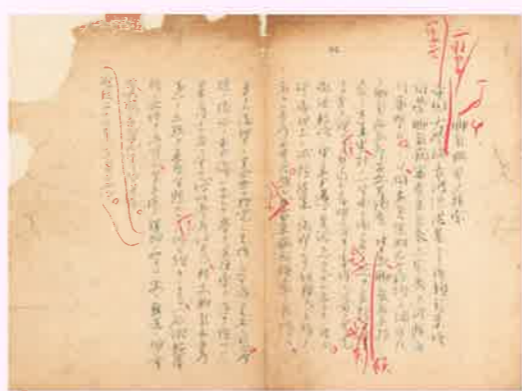
生の果物は口にしない。風呂に入らない。こうした鷗外の好みや行動は、何に由来するものなのでしょう。

明治の文豪・森鷗外は、その出発点においては、自然科学を志した医学者・森林太郎(本名)でもありました。本展では、林太郎の医学者としての足跡をたどるとともに、医学の視点から鷗外作品の再読を試みます。

森林太郎は、文久2(1862)年、代々津和野藩(現・鳥根県津和野町)の御典医を務めた森家の長男として生まれました。明治14(1881)年、東京大学医学部卒業後、留学への期待と家族の意に沿って陸軍に入り、明治17(1884)年からドイツで軍陣衛生学

や陸軍衛生制度を学びます。帰国後は、衛生学を専門とした医事行政に関わり、明治40(1907)年には、陸軍軍医総監、陸軍省医務局長に就任、大正5(1916)年に辞任するまで務めました。

今日、林太郎の医業(衛生学)について、「脚気論争」以外あまり知られていません。しかし、現代の私たちに与っては、当たり前前の都市計画や予防医学などにおける公衆衛生の必要性を発信したのは、他でもない林太郎でした。林太郎の言葉を借りれば、「衛生学」とは、私たちが健康に暮らすための環境を整備する身近な学問です。



自筆原稿「脚気病原/検索」 明治21年11月12日付

新しい医療体制の整備が急速に動き始めた時代に、林太郎が何を学び、何に取り組んだのか、また、それが現代の生活とどのように関わっているのかを、医学生時代・留学時代の自筆ノート、医学論文の自筆原稿、医学関係者との書簡などで紹介します。そして、文豪・鷗外として何を書き遺したのか、「仮面」「渋江抽斎」「伊沢蘭軒」などの作品を周辺資料とともに読み解いていきます。

林太郎の軌跡を追うことで、鷗外の意外な行動の理由、あるいは、その思想の根底にあるものが見えてくるかもしれません。

近代医学発展の地、文京区で、ドクトル・リントロウの解剖がはじまります。



明治19年1月



左 『衛生学大意』 明治40年7月 発行
 右 ロート博士から誕生日祝いにもらった酒杯

顕微鏡 東京大学大学院医学系研究科・医学部標本室蔵
 コウ写真工房撮影



関連事業のお知らせ

特別展期間中に関連講演会を予定しております。いずれも事前申込制、定員50名、当館2階講座室が会場です。申込方法は7頁をご覧ください。

「魔睡」の時代

催眠術から霊術へ

講師 一柳廣孝氏(横浜国立大学教授)
 日時 10月31日(土) 14時～15時30分
 料金 無料
 申込締切 10月16日(金) 必着

「鷗外とその時代の医療」

講師 酒井シヅ氏(順天堂大学特任教授)
 日時 11月14日(土) 14時～15時30分
 料金 無料
 申込締切 10月30日(金) 必着

ギャラリートーク

展示室2にて当館学芸員が展示解説を行います。

10月14日、28日、11月11日、25日
 いずれも水曜日14時～(30分程度)
 申込不要(展示観覧券が必要です)

森鷗外記念館で現代アート! Vol.3

「刹那」よ「生まれ、お前はいかにも美しいから」

ディレクション 倉林靖(美術評論家) 出品作家 富岡直子・佐野陽一

今年も、鷗外の仕事や作品を現代的価値や意味に繋げる試みとして、エントランスや、カフェ、図書室等の無料(ハブリック)ゾーンで現代美術の展示を行います。

ディレクションは美術評論家の倉林靖氏です。今年のタイトルは『刹那』よ『生まれ、お前はいかにも美しいから』。これは、大正2年(1913)に刊行された森鷗外訳・ゲーテ『ファウスト』の中のファウストのセリフを引用したものです。

長大な詩劇『ファウスト』全体を貫く重要なキーワードであるこの台詞が、単に瞬間

の外見の美について語ったものではないことは明らかです。人生の経験の蓄積を通じて、生の充実のなかのある瞬間の感覚が、内面的な充溢とともに新たな光を発しはじめ、永遠のものとも感じられてくる、恩寵のような稀有な時間について語った言葉なのではないでしょうか。文学者で医学者でもある鷗外は、ゲーテの作品を翻訳しながら、この言葉に、人間が癒され、より充実した存在になるところの根源的な状態を見、あるいはそこに、人間の理想への希望と憧憬を込めたのかもしれない。

今回出品いただく二人のアーティスト、富岡直子氏と、佐野陽一氏は、絵画、写真と手法は異なりますが、どちらも外界の光を映しながらも内的な光をもそこに染み出させようと、瞬間が永遠に繋がるような、恩寵のような知覚と経験、空間感覚と時間感覚を現出させることを試みている作家です。今回は二人の作品を通して、鷗外がファウストのセリフにこめた、瞬間と永遠をめぐると知覚と感覚を、現代につなぎます。

富岡直子氏は、一貫して「光」を追究し、「光」が観る者を包み込むような絵画作品を制作している作家です。本展では、近作『resonance』2点の他、ドローイングを10余点出品します。今回初めての公開となるドローイングは、作家の作品へのアプローチを垣間見ることができ、必見です。



佐野陽一「flow」 2004-05年 銀色素漂白方式印画 100×126cm

佐野陽一氏は、「世界を知覚する手がかりとしての写真」をテーマに、ピンホール・カメラの手法で作品を制作している作家です。本展では、水辺をモチーフとした『flow』『reservoir』シリーズ、分厚いアクリルでマウントし自立する小さな写真作品『vessel』シリーズなど、約15点を出品します。通常的美術館では見ることができない展示手法にもご注目ください。

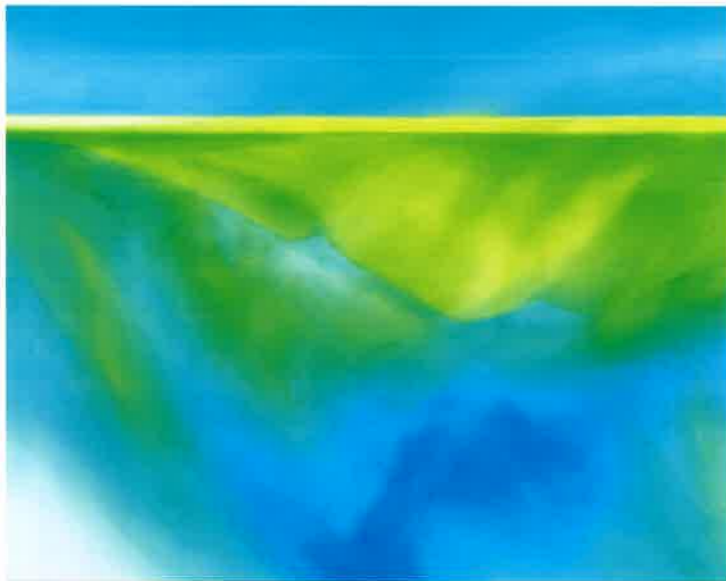
さらに11月は秋の夜長を楽しむスペシャルイベントが盛りだくさんです。
 11月6日(金)～8日(日)の3日間は開館時間を20時まで延長。日没後から20時まで当館の外壁を金大偉氏の美しい映像が彩ります。また、6日(金)、7日(土)には、日替わりで音楽ライブを行います。



金大偉 空間インスタレーション「Spiritual Harmony」 2014年 撮影:コウ写真工房

※本事業の関連イベント詳細は7頁をご覧ください。

富岡直子「resonance--II」 2008年
 アクリル・麻布・ハネル 72.7×91cm
 株式会社ヘリタス蔵



上 東京大学医学部時代の受講ノート
 下 恩師ベルツからの葉書 明治42年10月26日付



特別展

谷根千、寄り道“文学散歩”

本展では、「谷根千」の略称で親しまれる、谷中・根津・千駄木ゆかりの文学作品や、文人たちの交友を紹介しました。3つの地域ごとに代表作(谷中は幸田露伴の『五重塔』、根津は夏目漱石の『道草』、千駄木は鷗外の『細木香』)を据え、それぞれの印象的な引用文を掲げて、作品世界を演出しました。

作品にまつわる資料として、露伴愛用のグラスや煙管、漱石自筆の『道草』原稿、鷗外自筆の日記などを展示。鷗外と文人たちが交わした書簡などを展覧しました。また、スライドショー「鷗外と漱石と千駄木界隈を歩く」で、観潮楼(当館)から根津神社までのエリアにのこる、鷗外と漱石の足跡を紹介しました。二人の作品世界を歩いてみるみたいだと好評で、そのまま千駄木散策に出かける方もいらっやいました。

さらに、展覧会タイトルの「寄り道」という言葉から、記憶や事柄の連鎖をイメージし、主要作品の紹介だけでなく、そこから連想される別の作品や、土地にゆかりの文人に関する資料も展示しました。ご観覧の皆様にも、盛りだくさんの資料を通して、文学を越えたそれぞれの記憶の「寄り道」散歩を楽しんでいただけたようです。

ゴールデンウィーク中は好天に恵まれたことや、タイトルの親しみやすさから、本展を日指してご来館される方も多く、「谷根千お散歩コースの中心地となる」という当初の目標に一步近づくことができました。これからもぜひ、文学散歩のはじまりに、あるいは締めくくりとして、当館にお出かけください。

最後になりましたが、本展を開催するにあたり、ご協力賜りました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

協力：県立神奈川近代文学館、世田谷区立世田谷文学館、公益財団法人日本近代文学館、文京ふるさと歴史館、早稲田大学図書館

展示室2

展示室1



地域ごとにゆかりの作品と資料を展示
露伴愛用品(いずれも個人蔵)と、作品にまつわる資料
千駄木のコーナーでは、青鞥社や樋口一葉に関する資料も展示

※写真はいずれもコウ写真工房撮影

展覧会期間中に関連講演会を開催しました。

「鷗外と漱石の「谷根千」」(写真上)

日時：6月28日(日)14時～15時30分

講師：中島国彦氏(早稲田大学教授)

「若き日の森鷗外―文壇と交友―」(写真下)

日時：7月5日(日)14時～15時30分

講師：出口智之氏(東海大学准教授)



作品とそれが書かれた時代背景を重ねていくことで、漱石が見ていた事象を紐解いていく中島氏。同時代の文人たちの証言によって、鷗外と露伴をとりまく交流を実証する出口氏。一方で漱石が見た風景を共有し、また一方で文人の青春を垣間見、文豪たちと同じ時間を過ごしているような気持ちになりました。

活動報告

鷗外忌記念講演会「『雁』の東京」実施レポート

7月9日の鷗外の命日「鷗外忌」を記念して、作家・編集者の森まゆみ氏に、「『雁』の東京」というテーマでご講演いただきました。

鷗外作『雁』は、明治44年に連載がはじまり、大正4年に刊行されました。無縁坂を中心に、明治初期の根津、湯島、本郷界隈が舞台となった小説です。『雁』の物語世界が東京の地理とどのように重なっているのか、森氏が独自に編集された当時の地図を参照しながらお話が進んでいきました。

登場人物岡田の散歩道や未造の生活圏等を、物語に即して地図上で辿りながら、作中に描かれた場所にもつわる詳細なエピソードをご紹介いただきました。鷗外の小説に出てくる地理や、着物、食べ物、住まいの描写は大変正確で、明治の人々の生活がきちんと見えてくると森氏は言います。

女性が収入を得る手段が限られていた時代背景を踏まえながら、もう一人の登場人物お玉の描写にも話が及びました。森氏は、作中におけるお玉の描写がとも丁寧で細やかであるという点に触れ、そのモデルと言われている、児玉セキという女性に対する鷗外の想いが窺えると感想を述べられました。

谷中・根津・千駄木界隈を指す「谷根千」という言葉は、森氏らが編集した地域雑誌「谷中・根津・千駄木」の略称から広まったものです。森氏は、この雑誌の取材編集について、記憶を記録に変える行為だと語られました。ご講演でも、地域雑誌編集者ならではの膨大な情報量で、『雁』の舞台となった明治初期の風景を身近に感じさせてくださいました。



森まゆみ もり・まゆみ

1954年、東京生まれ。作家、編集者。早稲田大学卒業、東京大学新聞研究所修了。1984年に地元で地域雑誌「谷中・根津・千駄木」(通称・谷根千)を創刊。〈谷根千〉の名が広く知られるきっかけとなった同誌の編集人を、終刊の2009年まで務めた。著書に『鷗外の坂』(1997年 芸術選奨文部大臣新人賞受賞)、『即興詩人のイタリヤ』(2003年 JTB紀行文学大賞受賞)、『青鞥』の冒険一女が集まって雑誌をつくるということ』(2014年 紫式部文学賞受賞)等多数。

これからの催しもの

催しは◎以外は全て事前申込制です。各申込締切日必着でお申込みください。詳細は、チラシやHPをご覧ください。当館までお問い合わせ下さい。

★応募多数の場合抽選とさせていただきます。
★有料のプログラム参加者はイベント当日にかきり、展覧会観覧料が免除となります。
★悪天候等やむを得ない事情により、日程・講師・内容を変更する場合があります。

11月1日(日) 10:00～17:30
文京区立森鷗外記念館
開館記念日行事◎
当日展覧会を観覧された方全員に、オリジナルポストカードをプレゼント。

11月7日(土) 18:30～19:30
新・観潮楼歌会 音楽ライブ
リコーダーと
チェンバロのデュオ◎
～ドイツ・バロック音楽から
明治まで

演奏：渡辺玲子氏(チェンバロ)、
倉林靖氏(リコーダー)
会場：エントランスホール
料金：無料
チェンバロ、リコーダーによるバ
ロック音楽の演奏をお楽しみいた
できます。

1月19日(火) 10:00～17:30
鷗外誕生日記念行事◎
鷗外の154回目のお誕生日を記念
して、無料で展覧会を観覧いた
できます。

10月31日(土) 14:00～15:30
展示関連講演会
『魔睡』の時代―催眠術から霊術へ

11月6日(金) 18:30～19:30
新・観潮楼歌会 音楽ライブ
Dream of Neo Asia◎
演奏：金大偉氏
会場：エントランスホール 料金：無料

11月13日(金) 18:30～19:30
新・観潮楼歌会
鷗外記念館でコンテンポラリーダンス vol.3
鷗外Girls
出演：おやつテーブル 会場：館内各所
料金：1500円 定員：40名 申込締切：10月30日(金)

11月28日(土) 13:00～17:00
鷗外をめぐる散策
晩秋の都心 鷗外ゆかりの地を訪ねる
講師：倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事)
会場：虎ノ門から汐留・新橋停車場まで
料金：1,000円(交通費・保険料込)
定員：15名 申込締切：11月13日(金)

10月10日(土) 14:00～16:00
文の京ワークショップ・読書会
『高瀬舟』を読む―生と死をみつめる

11月6日(金)～8日(日) 17:00～20:00
新・観潮楼歌会 空間映像インスタレーション
Landscape of Illusion and Colors◎
夢幻と色彩の風景
会場：外壁 金大偉氏の美しい映像が、夜の記念館を彩ります。

11月8日(日) 13:30～16:00
文の京ワークショップ 鷗外を歩こう
「続『青年』純一と鷗外が通った道」

11月14日(土) 14:00～15:30
展示関連講演会
鷗外とその時代の医療
講師：酒井シヅ子氏(順天堂大学特任教授)
会場：講座室
料金：無料 定員：50名
申込締切：10月30日(金)

◆◆文京区立森鷗外記念館イベントの申込方法◆◆

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで、親子プログラムおよび親子向け推奨のプログラムに関しては親子一組につき1通)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

- ①往復はがき 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号を、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。
- ②Eメール 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@moriogai-kinenkan.jpまでご応募ください。 ※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

【ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外の使用はいたしません。】

ボランティア活動ノート

今年4月に募集した二期生解説ボランティアが、この9月から始動します。5月7日まで森鷗外記念館で行われた「鷗外講座基礎編」を、6回全て受講した5名の先鋭達です。一期生に続き、情熱をもった方々が集まりました。一期生とともに、記念館をますます盛り上げてくれる皆さんの活躍をご期待ください。

ボランティア解説は、土曜・日曜・祝日の13時と15時の2回行っています。



前回好評をいただいた解説ボランティアによる文学散歩を、今年も行うことが決定しました。既に有志達によって文学散歩に向けた打ち合わせが行われ、毎回自然の意見が交わされています。今回のタイトルは、「続『青年』純一と鷗外が通った道」。どのような内容になるかは参加してからのお楽しみですが、前回の経験がふまえながら、より充実した内容をお届けします。記念館ならではの文学散歩ぜひご参加ください。

平成27年度後期 文京区立森鷗外記念館 開館カレンダー

10月

日	月	火	水	木	金	土
				①	②	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	②⑦	28	29	30	31

11月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	⑥	⑦
⑧	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	②④	25	26	27	28
29	30					

12月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	⑦	⑧	⑨	⑩	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	②⑨	⑩	⑩	⑩	⑩

1月

日	月	火	水	木	金	土
					①	②
③	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24 31	25	②⑥	27	28	29	30

2月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	⑧	⑨	⑩	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	②②	②③	24	25
26	27	28	29			

3月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	②②	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

- 特別展「ドクトル・リントロウー医学者としての鷗外」
10月3日(土)～12月6日(日)
 - コレクション展「鷗外と京都・奈良」(仮)
12月11日(金)～2月7日(日)
 - コレクション展「約100年前の鷗外」(仮)
2月11日(木)～4月3日(日)
- 休館日
○ 20時まで開館

編集後記

7月17日～9月27日に開催した、コレクション展「鷗外を継ぐー木下李太郎」は、(鷗外以外では)文人一人だけにスポットを当てた、初めての展覧会でした。李太郎は文京区ゆかりの文化人です。静岡県伊東市出身の李太郎ですが、13歳で上京した後は本郷西片町に住み、小石川白山御殿町に転居して東京帝国大学に通いました。医学者と文学者の二つの側面を持つことなど、鷗外との共通点の多い李太郎は、当時から「鷗外2世」と言われていたそうです。8月22日には関連講演会として、今橋映子氏(東京大学大学院教授)による「鷗外を継ぐ者ー木下李太郎のパリ」を開催し、たくさんの方にご参加いただきました。鷗外と李太郎という二人の出会いや関係性が、現代に生きる我々をも巻き込み、観潮楼に集うべく足を運ばせたのかもしれない。

同展は、広報物(チラシ、ポスター)においてもこれまでとは異なり、李太郎の肖像写真を大胆に使用したデザインのものでした。当館では、展覧会は開催毎イベントは半期毎に広報物を作成しています。内容や開催意義を伝えつつ、いかに多くの人に関心を持っていただけるか、デザイナーの力を借りながら印象的なデザインやビジュアルを作成しています。

今回の展覧会も、医学の要素を引き継いで、医学者としての鷗外の側面を紹介する内容です。チラシにはイラストレーターの井筒りつこ氏によるイラストが大胆に配されています。展覧会と共に広報物もお楽しみください。

交通案内



- 電車をご利用の場合
 - ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
 - ・東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
 - ・都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分
 - バスをご利用の場合
 - ・都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
 - ・都バス 上58番系統「団子坂下」下車 徒歩5分
 - ・B-ぐる千駄木・駒込ルート「18特別養護老人ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511
URL: <http://moriogai-kinenkan.jp>

文京区立
森鷗外記念館
Mori Ogai Memorial Museum

開館時間 10:00～18:00 (最終入館は17:30)
休館日 毎月第4火曜日(祝日の場合は開館、その他例外あり)、
年末年始(12月29日～1月3日)、及び展示替期間、煙蒸期間等